

旧石器時代とその終焉

旧石器時代の人々は、マンモスやヘラジカなどの大型動物を追いかけながら移動生活をしていました。北海道で最も古い遺跡は約3万年前のもので、後期旧石器時代に属しています。

すでに述べたようにこの時期は最終氷期に当たりますが、なかでも最寒冷期となる約2万年前から「細石刃」という石器が急速に増え、温暖化が始まる1万5千年前を経て1万2千年前まで盛んに使われました。細石刃とは長さ3～5cmの細長い剥片を木製や骨製の柄の両側に溝を彫って列状に複数取り付け、狩猟用の槍などとして使ったものです。少量の石材から大きな利器を作ることができ、また植えた刃の部分を取り換えれば切れ味の蘇る大変便利な道具でした。シベリア周辺では北海道よりも古い段階の細石刃が多く分布することから、大型動物を追いかけながら、アジア大陸と陸続きになっていたサハリン島を南下し、半島の一部になっていた北海道島に人々が移動してきたと考えられています。

一方、このような北ルートとは別に、列島の西の九州側にもやや遅れて約1万5千年前に細石刃が入ってきます。そして、その後訪れる急激な温暖化と環境の変化にともない、主にこの細石刃文化を母体として縄文文化が日本列島で生まれました。



細石刃(上段)と細石刃核
 晝遺跡(帯広市)撮影:佐藤雅彦



細石刃が埋め込まれた植刃器
 熊の悲劇洞窟(サハリン)

写真の出典: Vasilievski Alexander 2008, Мамонтовая фауна и адаптация человека на Сахалине. Human Ecosystem Changes in the Northern Circum Japan Sea Area in the Late Pleistocene. The University of Tokyo, PR44-67 及び Vasilievskiy A.A., Высоков М.С. 2012, Сахалин и Курильские острова. История с древнейших времен до образования Сахалинской области. Южно-Сахалинск: изд-во «Рубеж», 320с.

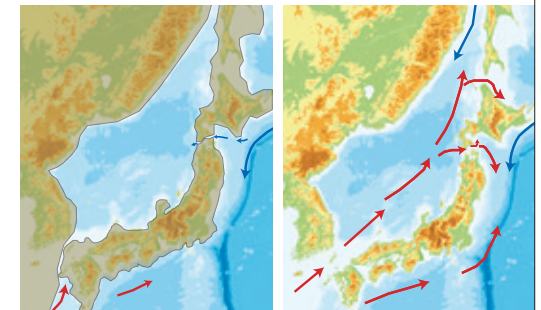
温暖化と縄文文化の始まり

地球の歴史を見ると、寒冷な「氷期」と温暖な「間氷期」を数万年周期で繰り返しており、約1万5千年前からベーリング／アレレードと呼ばれる急激な温暖化の時期を迎えます。

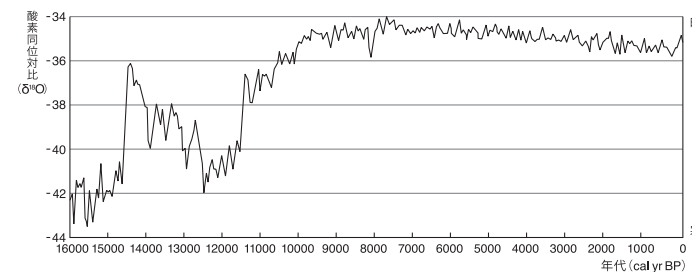
この温暖化によって海水面が一気に130mも上昇し、北海道とサハリンは大陸から離れて島となります。また、氷期にはほぼ閉じていた対馬海峡が大きく開き、湖の状態だった日本海に暖流の対馬海流(黒潮)が大量に流れ込んで北上します。また、日本海に流れ込む海流の量が多いため、溢れた暖流が北海道と本州の間の津軽海峡を通して太平洋に流れて本州北部の東岸沖を南下し、一方は北海道渡島半島の南東部を北上するようになります。

温暖化による海水面上昇と潮流の流れの変化は、日本列島の自然環境の形成と縄文文化の萌芽を考えるうえで重要な要素です。暖流は海面の表層を流れるので、そこから生じた水蒸気が列島に雨や雪を降らせ、温暖・湿潤で四季がはっきりした気候が形成されました。山々には緑豊かな森林と小河川が形成され、また海水面上昇とともに潮流が活発化したことにより、近海には様々な海洋生物が息するようになりました。狩猟・採集・漁労を生活の基盤とする縄文文化は、こうした生物多様性に満ちた自然環境の形成とともに発生することになります。

地球規模で見ると、北米大陸やヨーロッパではヤンガー・ドリアス(12,900年前-11,500年前)と呼ばれる寒冷化が再来しますが、日本列島は暖かい対馬海流に囲まれていたためか、北半球の他地域に比べ、劇的な寒冷化は確認されていません。暖流に囲まれ比較的安定した環境が維持されたことが、縄文文化の形成においても幸いしたのかもしれない。



この地図は国土地理院の電子地図を使用。
 約2万年前(左)と縄文時代以降(右)の海流
 *赤:暖流(対馬海流) 青:寒流(親潮)



北グリーンランドの氷柱
 コアから想定される気候
 変動の模式図